

立川流再興と伝統保存のあり方に思う

間瀬 恒祥

(立川流彫刻研究所 主宰)

はんだ山車まつりが開催されてからというもの
は祭り専門家がにわかに増え、蘊蓄を語っている
姿をよく見かける。プロ野球のファンがまるで監督
にでもなったつもりで選手の動きや監督采配を
評価し、持論を語っているのに似ている。それほど
この地方では、ポピュラーな話題となっている
のが山車祭りである。とりわけ彫刻には詳しく総
評論家のようなものである。

私は、立川流彫刻というものを追求してきたが、
私の子供のころは立川流ということばはほとんど
聞かれなかった。知多の彫刻については立川流山
車彫刻が多く残されている亀崎でも「諏訪の和四
郎」としか言っていなかった。伝説的な名工でい
いものだというくらいで題材や作風を今のように
専門的な捉え方をしている人はほとんどいなかった
ように思う。私自身子供のころはそんな知識も
なく、ただ、家族から親戚には宮大工がいたとい
うことを聞いていたくらいだった。

私はお祭りは好きであったが、物を作ることへの
興味の方が強かった。祭りと物づくりと好きが
重なり、小学校3年生ころからダンボールを駆使
して山車の模型作りに没頭していた。紙では飽き
足らず、高学年になると、木材を使って作りだした。
10歳のときの作品が今も立川美術館に展示
してある。



小学校時代に作った山車の模型

このころ私の美術と物づくりを後押しした人が
2人いた。1人は母親だった。私の親戚は画家が
多くいた。その1人が日展日本画家の服部有恒画
伯だ。母はこの人を誇りに思っていたようで、私
に幼いころより絵を習わせた。私も有恒画伯に尊
敬の念をもつようになり、大人になってから画伯
の作品を尋ね歩いた。中でも名古屋市役所の貴賓
室にあった「郷土の英傑」の絵画は印象に残る作
品の一つである。私の彫刻雅号は有恒の恒をいた
だき、「恒祥」とした。そしてもう1人が小学校
5年生の担任であった。この先生はとにかく器用
な人で、精巧な竹細工から、大工仕事まで見事に
こなし、私の物づくりの好奇心に拍車をかけた。
縁とは異なるもので、後に分かったがこの先生は立
川流とかかわった知多の宮大工の末裔であった。
私が立川流再興の活動を始めたときから終生、支
援をしていただいた恩師であり恩人である。この
ころに私の美術・造形の基礎ができていったよう
に思う。

立川流再興への志をもつ転機となったのは何と
いっても二代彫常新美茂登司先生との出会いにあ
る。大学に入って、少し余裕ができたころ、もう
一度美術を習ってみようと思っていた。それと同
じころ、亀崎潮干祭青龍車のからくり人形の復元
にも取り組もうとしていた。からくりを作るにも
彫刻が必要となるため、この際、宮彫りを習っ
てみようと思常師のところへ通うようになった。

通常この世界は内弟子として弟子入りし、たた
き上げられていくわけである。このことを今に
なって思えば、私のような学生がひょっこり現れ
たことで、彫常師はさぞかし困惑されたことと思
う。彫常師は、確か大正元年の生まれと記憶して
いる。半田地区の山車彫刻作りの最盛期から、伝
統に振り向かなくなった高度成長期のころまで、
激動の時代を駆け抜けてこられ、私が通い始めた

ころはひっそりと仕事をされていた。彫刻職人であるので、すべては仕事として注文を受けた彫刻づくりである。注文ではなく、自分の好きなものを一度でいいから自由に彫ってみたいと時折おっしゃっておられたことが印象に残っている。



二代彫常氏(左)と筆者(右)

彫常師はかたくなに弟子はとらなかった。生活の保障も出来ないことをやらせるわけにはいかないという厳しい世界を生きてこられたこそその重みのあることばだった。ちょうどそのころ、7代目玉屋庄兵衛師から、後を継いでくれないかと誘われていた。彫常師から、馬鹿な考えは起こさないようにと諭された。

彫刻という飾り物は、家屋の建築においても、どうしても必要なものではない。立川流はもともと宮大工の集団で、彫刻が評判であったため、「大工方」、「彫刻・大工方」、「彫刻方」の3種類に分類され集団製作してきた。明治以降、立川流が衰退していったころ、最も大変な思いをしたのは彫刻専門の人たちだった。大工仕事のできる人たちは、神社仏閣建築から、学校の校舎などの大型建造物への応用、一般家屋等、職業として生きる道があった。しかし、彫刻専門の人たちは、床置、根付と作品も小さくなり、趣味的な収集家の仕事くらいになってしまった。立川家最後の彫刻師立川尚富は警察官をしながら、彫刻制作をした。彫常師の言われることは、まさに立川流の衰退の世界と同じ意味合いを含んでいた。そして私は、愛知教育大学卒業後、ごく人並みに教職に就職した。これがまた運命のいたずらか、彫常師の自宅から300メートルほどしか離れていない半

田小学校に赴任することになった。私は彫常師に就職し生活の糧をつくったので指導してくださいとお願いし、学校の仕事が終わると通い指導を受けた。大学時代から13年間指導を受けた。何年か通ったあるとき、私が「先生、私はもう弟子とっていいですか」と尋ねた。そのとき「おまえの役立つようにしなさい」とありがたい言葉をいただいた。私がいろいろ教えてほしいと願うと、「あんたは教えることが仕事だが、私は教えることはやったことがないし、親方から丁寧に教えてもらったこともない」といった調子で要するに、盗むしかなかった。このとき私は「見習い」という言葉は実に日本の風土にピッタリのものだと思いながらひたすら盗むことにした。

私の家は先祖代々白木屋、つまり材木問屋で分家が宮大工という建築一族で、この宮大工は知多の立川流と関わり、山車や神社仏閣をつくっていた。晩年は京都東本願寺の仕事をし関西の人となった。彫常師との話のなかで、折にふれ後継者の話題となることがあった。そんなとき、私は家族の歴史的環境を知ることと、立川流を追求した彫常師から彫刻の指導を受けたものとして、ある種責任めいたものを感じるようになっていった。後継者の話をされるときの彫常師の寂しそうな目を見ると、その伝統の技を習ったものの立場として、私の心は揺さぶられた。終生立川流を手本とし、技を磨いてこられた彫常師と私の一族の関わりから消えてしまった立川流を再興していかなければならないと心に誓った。その中で、日本における伝統文化の伝承のあり方を思い、旧来の内弟子として職人となり職業としてそれを生業とするのではなく、今後は技術の専門家集団が伝統を伝承していくことが必要なのではないかと考えた。伝統文化でも音楽関係はそれが上手くやれている。琴、三味線、民謡などプロでなくても充分伝承できている。ところが伝統彫刻の世界は全くできていなかった。なぜかと考えると、伝統彫刻の世界は作ったものを取り付ける対象となる建造物が必要であったからだ。例えば、山車、神社、仏閣、一般家屋だと欄間となってしまう、素人が嗜むにはかけ離れてしまうことが、一般の人が取り

組めない壁なのだ。加えてもう一つの壁がある。彫刻の分野で宮彫りは過去の美術でもはや美術として扱われず作品として展覧会に出すことができないということだ。私は、伝統彫刻が、一つの美術として独立した作品づくりをするべきだと考えた。そうした考えの中で、平成元年に立川流彫刻研究所を設立しプロ、アマ含めた、立川流の彫刻家を育てていくことにした。要するにカルチャー教室の中に伝統彫刻を取り組んでみた訳である。といってもただのカルチャー教室ではなく、立川流というものの全体を研究し、後世に残していく使命を帯びた存在でなければならない。そこで、画家、歴史研究家等も一員として参加していただき、彫刻技術だけではなく、立川流という文化そのものを研究追求し伝承する研究所としてスタートさせた。

研究所は、美術、技術、学術の3本の柱をもって研究しているが、それほど立川流というものは

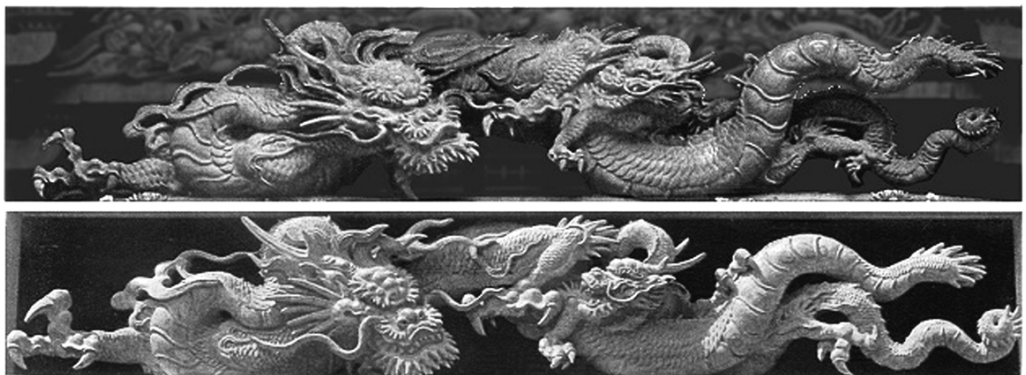


立川氏(中央)・立木氏(右)と筆者(左)

奥が深くハイレベルな伝統文化である。立川流再興といっても生易しいものではない。この活動のなかで重要であったのがかつての立川流棟梁のご子孫たちの協力であった。本家立川家、幕末の立川流をまとめた立木家等、棟梁家による資料協力をいただき、日々資料分析や伝統の踏襲に励んだ。また立川流建造物の現地視察など、立川家と二人三脚で立川流再興を押し進めてきた。

再興にあたってはまずは同じ造形ができなくてはいけなくて特徴を捉えることが重要であった。また、年代による造形の違いや棟梁による作風の違いなど研究し、過去のものの修復にも対応できるようにした。

再興するときの難しさは、一旦消滅してしまったものを、直伝されることなくどう対応するのかということにある。例えば、最近、名古屋城の襖絵が愛知県立芸術大学の関係者で復元されているが、彼らは狩野探幽に直伝されたわけではないが充分復元できている。まさにこれと同じで、日本画の優れた技能と高度な資料分析そして芸術性をもちあわせていけば、直伝されなくても再現できるわけである。立川流彫刻においても全く同じである。ましてや、私が彫常師に習ったときのように、盗む部分が多いので江戸時代直伝されていたころも、多分にその人の研究と工夫、美術力で伝承されてきたものがあると推察される。ただ忘れてはならないことがある。



二代立川和四郎作品(上)と恒祥作品(下)(高山素玄寺)

立川流は過去の美術ではあるが、ただの職人芸ではなく、芸術性の香りのある美術品であることだ。鑿が自由自在に揮えるということで、単純に真似をして彫ってみてもそうはいかないところに伝統美術の伝承に大きな誤解がある。

昔の山車はすばらしいものができている。もちろん名人が作ったからすばらしいのだが、それ以前にこれを作らせた旦那衆と呼ばれる豪商たちの美術力を忘れてはならない。彼らは金持ちであると共に文化人であった。書画を始め、茶の湯、生け花、俳句等々、幅広く文化を身につけることで、間違いのない日本の美を追い求めてきた。そうした人たちの後押しで優れた伝統美術が伝承されてきた。

はんだ山車まつりが回を重ね、いまや全国的に知られるようになったが、それを支える人たちがマニアックな物知りではなく、文化人として広がりを見せると、伝統美術の伝承も江戸以来の流れをせき止めず、大河となってこの地に繁栄することが出来るのではないかと考える。